

直木賞受賞エッセー 朝井リョウ

子どものころ、短パンをはいていた夏、体操座り。汗でしめっているひざをなめてみたら、思ったよりもしょっぱくてびっくりする。

中学生のころ、夕暮れ、通学路。あんまりいい関係ではない人が自分の前にいて、追いつかないように、一定の距離を保ったままそろそろと慎重に歩く。相手が赤信号で止まると、そのまま歩き続けることができなくなって、自分



直木賞に決まり、記者会見する朝井リョウさん＝東京・丸の内会館

あさい・りょう 1989年岐阜県生まれ。早稲田大在学中に「桐島、部活やめるってよ」で小説する新人賞を受賞。就職活動する大学生たちの苦闘やぶつかり合いを描いた「何者」で第148回直木賞に決まった。

ると、不思議と、たぐさは、そんな発見がたぐさんんの人が共感をしてくれる。「私だけ」と「万人の共感」は実は隣り合

るならば、就活。ツイッタ。この二つだろう。人生において、ほんの一瞬だけ

が、私は一番かなしい。確かに、就活もツイッタも、人々は一瞬で通り過ぎてしまふかもしれない。普遍性がないと思わ

ツールを器用に使いこなす登場人物は、確かにこの現代のみに生きているように見えるかもしれないけれど、そんな彼らが思い悩み、惑うことは、実は「誰の心の中にも、永遠にありつづけること」なのではないかと思

れたしまふかもしれない。けれど、私はあることを信じてこの小説を書いたのだ。

そういう意味で、「何者」という作品は挑戦だった。「私だけ」が、本当に「私だけ」のまま閉じてしまふ可能性だって、あった。だから、この作品がこのような賞に選んでいただけの意味は、私にとって、本当に大きい。

一滴のインクのように

が世界のどこにも立っていないような気持ちになる。

せにある。その事実、私はこれまで何度も救われてきた。

れた。ひろいひろいこの世界で、自分はひとりではない、のかもしれない、という甘く輝くような予感が、本からはいつだって薫って

体験するもの、5年後、10年後にはすっかり忘れ去られているかもしれないものが、多く出てくる小説だ。

小説に出てくるアイテムが変わっていても、それを使うのは、人が生きていくという事実、生きている人が本を読むという事実は、ずっと変わらない。スマートフォン、ツイッター、フェイスブック。あらゆる

私はこれからも、自分の心の中に眠る、ほんの一点を描いていきたい。そして、水面に落とされた鮮やかな一滴のインクのように、その一点が一億人の心までひろがっていくところを見てみたいのだ。(作家)

思い出や記憶の中の、ほんの、小さな点のようなもの。自分だけの経験、記憶だと思っていたもの。そういうものを細やかに描写す

た！自分だけじゃなかったんだ！本の中に

私の6作目の小説「何者」からキーワードを抽出す

ああ、自分には関係のない小説だ。そう思って本を棚に戻されてしまうこと

た！自分だけじゃなかったんだ！本の中に

ああ、自分には関係のない小説だ。そう思って本を棚に戻されてしまうこと